

演題名 地域で繋がり、顔の見えるまちづくりの実現

筆頭演者 永舂千春¹⁾

1) 医療生協さいたま生活協同組合 深谷生協訪問看護ステーション

はじめに

- ・深谷生協訪問看護ステーションは開設から7年、医療生協さいたま独自の支援体制を最大限活用し、地域に根付いた看護を提供している。生協10の基本ケアの推進、安心システムの構築、くらしサポーター制度の活用、組合員との連携による見守り活動等の型にはまらない幅広い支援によって利用者・家族の在宅生活を支えている。
- ・住み慣れた自宅で最期を迎える利用者は増加(当事業所の2019～2021年度の在宅看取り件数は17件)している。
- ・在宅見取り、お悔み訪問等を通してグリーフケアの必要性を感じ、特に家族へのケアを重要視している。
- ・精神科訪問看護を必要とする利用者が増加しており、自立支援の場や機会が必要と感じている。

地域の組合員による組合員同士の見守り活動の実施

- ・支部の組合員同士で地域の見守り活動を行い医療的ケアの必要な方を見つけ、訪問看護利用開始につながる事例がある。
- ・私たちが元気になった利用者さんを支部につないで組合員活動を通して元の地域活動をしてもらいたい。
- ・「支部とステーションの関係を作って、ステーションから支部に紹介するパターンがあってもいいのではないか」といった意見がある。(支部長：Nさん)

「偲ぶ会」の開催



各テーブルごとに担当医、看護師、関係者のご家族を囲み歓談。故人の元気な頃のお話、在宅療養中のエピソードを繰り返し、和やかな雰囲気と同じ時間を共有しました。円能寺にて開催し15名のご家族が参加。

「地域いきいき交流会」の内容

- ・案内用紙の準備
- ・車椅子、椅子、テーブルを使用し、三角移乗のデモンストレーションの実施
- ・偲ぶ会参加者、各関係機関に案内状のお渡し。
- ・FMふっかちゃん、深谷コミュニティFMにて開催案内。
- ・訪問先である小児のご家族より「医療的ケア児の交流の場が欲しい」との要望があったため対象の方への声掛け。
- ・地域との繋がりを深める為、近隣の障害者就労支援事業所、配食サービス事業所への参加依頼。
- ・看護師、理学療法士、臨床工学士、歯科衛生士(息育指導士)相談窓口を用意
- ・「生協10の基本ケア」を広めるために体験型のブースを設置
- ・利用者参加型にする事により地域との交流をさらに深める

「地域いきいき交流会」アンケート報告

- ・作業所で販売の仕事がストップしているので、人の役に立つことが嬉しく楽しかった。是非またこのような機会をつくってほしいです。(精神科訪問看護の利用者3名)
- ・普段寝たきりで外出の機会がなかったが、買い物やコンサートなどを楽しむことができて本人・家族共に良い時間が過ごせた。(介護タクシーを手配して参加した訪問看護の利用者2名)
- ・今後も医療生協と繋がり、組合員活動やボランティア活動に参加したい(くらしサポーター2名登録)
- ・訪問看護での医療や介護以外の活動を知る事ができた。
- ・コロナ禍で外出の機会が減りひきこもりがちだったので、親子で良い時間が過ごせた。

日本HPHネットワーク 利益相反(COI)の開示

筆頭演者名:永舂千春

筆頭演者ならびに共同演者に開示すべきCOIはありません。

生協10の基本ケアの推進



生協が大切にしている介護

- その1：尊厳を守る
- その2：自立を支援
- その3：在宅を支援

2022年度 達成基準

- 安心システムの取り組みを、全ての地域でさらに前進させます。MC(まちづくりコーディネーター)と協力し合い、地域住民とのつながりをつくる活動に取り組みます。
- 全ての職員が生協10の基本ケアの視点でアセスメントする力を身につけます。

- ①施設では車椅子で食事をしている利用者をゼロにします(食事の際は椅子に座ります)
- ②施設・在宅では、家庭浴で入浴できる利用者を増やします
- ③施設・在宅では、夢中になれることや生きがいを見つけ夢をかなえるケアプランを作成します

くらしサポーター制度の活用



組合員同士が困ったときにお互いを助け合う制度で、コーディネーターが依頼者とサポーターをつなぎます。深谷生協訪問看護ステーションでは、担当看護師がサポーターの支援するので相談できて安心です。

- ①コーディネーター役を訪問看護師が行い、依頼者とサポーターを当ステーションの利用者さん同士で行い支援し合う。
- ②サポーター役を精神科訪問看護を受けている利用者Aが担い、担当看護師がサポートしながら買い物支援を行う。
- ③仕事のできた喜び、社会参加がきっかけとなり、自立支援へとつながる。一度成功体験があると次々となることが増える。

「偲ぶ会」への取り組み手順

- ①偲ぶ会に招待する方をリスト化
- ②過去のお悔み訪問ファイルや個人ファイルを参考に当時の状況、家族関係を振り返り、絞り込みを行う(例：一人暮らし、外部との繋がりが少ないなど)
- ③訪問に携わっていた看護師が電話連絡をし、現状の把握
- ④偲ぶ会の主旨をお伝えした上で参加の有無を確認する
- ⑤ご自宅に訪問し、招待状をお渡しする(見守り活動)
- ⑥対象者の主治医、相談員等の連携先を招待
- ⑦地域に繋げる為、地域総合サポートセンター、組合員支部長、深谷寄居在宅医療連携室に情報提供
- ⑧当日参加の叶わない医師や関係者からビデオメッセージをいただく

地域で繋がり顔のみえるまちづくりの実現

- ・コロナ禍でふさぎ込み、孤立している人はいないだろうか
- ・悲しみや不安を一人で抱えてはいないだろうか
- ・コロナ禍で人との交流が減って、引きこもりがちになったり日常生活での活動量が低下しフレイルの進行が心配
- ・病を抱える人から、地域の方、全ての方と交流したい

➢「地域いきいき交流会」開催を提案。
訪問看護ステーションの役割が医療・看護業務だけではないということを知ってもらいたい。

「地域いきいき交流会」当日の雰囲気



300年の歴史がある酒造跡で行われた地域いきいき交流会。日頃つながりのある近隣のNPO法人、社会福祉法人、利用者、家族、医療機関、一般市民ら150人が参加した。

まとめ

- ・在宅見取り後に家族ケアを行い、想いや時間を共有することが大切。ご家族だけではなく、医療スタッフ・各関係者の振り返るきっかけとなり、今後の課題に繋がる。
- ・多職種で家族ケアを行う事で地域医療を円滑にし、医療者同士の顔の見える関係も構築できる。
- ・在宅支援にとって生協10の基本ケアの推進は柱となり、とても重要な事である。
- ・地域交流をきっかけに精神疾患、障害を抱えた方の尊厳を守り自立へと繋げる一歩となった。
- ・イベントを開催することによって利用者や地域の声を直に聞く事ができ、今後の課題が見えやすい。
- ・医療生協さいたまには、気がかりのバトンの受け手がたくさんいる。

今後の課題

- ・偲ぶ会、地域いきいき交流会の定期開催
- ・利用者、地域の声に目や耳を傾け、「安心システム」の更なる構築
- ・見守り活動から、支部とステーションでつなぎ合う関係性の定着
- ・地域の組合員さんと情報を共有するために、ケア会議の実施
- ・支部運営委員会への参加、支部での定期的な学習会の実施
- ・組合員の確保、くらしサポーターの利用拡大

地域との顔の見える繋がりを大切にし、住み慣れた場所で安心して暮らせる街をつくる。
「支え合いのまちづくり」を目指し気がかりのバトンをつないでいきたい。

